

白雄句集
春

樞寮碩布著

白雄句集

春秋菴藏板

身を煩ふて大事なる
 人有けり。なしの花
 の今を春と咲たるを
 見て、なしのほしき
 と乞わびしに、いか
 がして持たり劍、な
 らの古葉に包みたる
 を、あとはなしとて
 只ひとつ遣ければ、
 かぎりなく嬉しがり
 て、あとのなからむ
 とにやくらひもやら
 ず。撫さすりつゝ抱

身を煩ふて大事なる
 人有けり。なしの花
 の今を春と咲たるを
 見て、なしのほしき
 と乞わびしに、いか
 がして持たり劍、な
 らの古葉に包みたる
 を、あとはなしとて
 只ひとつ遣ければ、
 かぎりなく嬉しがり
 て、あとのなからむ
 とにやくらひもやら
 ず。撫さすりつゝ抱

きて寐たりなどしけるに、梨子の肌つやくとかたまり光出て、家の隅までも照す程に、いつか玉にぞ成ける。つばくらが子やすの貝、たつのくびの五色の玉とも思ひくらべて、胸くるしく苦き時も、此玉を抱けば苦みもやみぬ。かしらいたく身ほとほる事もな

梨子の肌つやと
 かたまり光出て
 家の隅までも照
 す程に、いつか
 玉にぞ成ける。
 つばくらが子
 やすの貝、たつ
 のくびの五色の
 玉とも思ひくら
 べて、胸くるし
 く苦き時も、
 此玉を抱けば
 苦みもやみぬ。
 かしらいたく
 身ほとほる事
 もな

くなり、常のやすき
 にかへりしとかや。
 しらをの翁をまねし
 たひて、花とりと思
 ひくるしむ人にも、
 此集ぞよきふところ
 ものなるべし。玉を
 もうまざらめや。只
 見人のせちとせちな
 らぬによる事を。さ
 てそも是をゑりまろ
 めて、もろ人にあた
 へむとする毛呂のせ

玉を
 もう
 まざ
 らめ
 や。只
 見人
 のせ
 ちと
 せち
 な
 らぬ
 によ
 る事
 を。さ
 てそ
 もそ
 も是
 をゑ
 りま
 ろめ
 て、も
 ろ人
 にあ
 たら
 せむ
 とす
 る毛
 呂の
 せ

きふが動しは、あら
 川の菰藻より長く、
 むさしのゝほすゝき
 よりしげりて、雪降
 そらに瓜をさゝげ、
 花咲あめになしをお
 くりたるのたぐひに
 はあらぬのみ。

みちのくの
 みちひこ

何れもあつたきふの
 雪より瓜をさゝげ、
 花咲あめになしをお
 くりたるのたぐひに
 はあらぬのみ。

有雄句集卷之一

春の部

歳旦

元旦や大樹のもとの人ごころ
万歳の願ながき旦那かな

あをげばいよ／＼鳳凰城、
俯してます／＼國恩を思

若水やおよそ玉川猪のかしら

天鷲羽うつて萬鷄うたふの
此曉、踐約せしむたり、杳

ふみしめて山にのぼる田毎
の日記を戀しけれ。その田
毎の日影戀しきが故也。山
は焼すてしところにて、何
れを年の始の姿といふべく
もあらねど雪のむらさへな
るに、日のかはらかに光り
あひたる、ものなつかしき
且なりけり。

碩布著

春はまだ田毎の雪間／＼かな

勢大崩前元日立春

相の木に今春たてる神路山

信中虎杖菴に春をむかひ、

雪のきゆるを待て皇都に杖

ひくべき趣を、人々にさゝ

やきはべりて

初がすみきその嶽々たのもしき

北緯千葉、宗胤禪刹に春を

むかふ

歳ありて般若の聲を三の朝

鎌道およびその人々が、

せちに霜雪の行脚を勞りし

にぞ、はからずも甲斐の國

栗原の驛に春をむかふて

身の春や遊ぶところに日かげさす

相中酒匂、南藤蜜(密)刹に

春を迎ふ

みなみどり松を見海をけさの春

武野桃原菴に春を迎ふ

主がせちより先づ風の貧を

忘

世とよに身のきを始おもふかな

夜道の行かひしげきには、

さしも降つる白雪のあとか

たもなく長閑也けり。

菴にのみふるとしの雪を門の春

法華書寫思たちし年の且

心こめて筆試るとしかな

門人に草菴ゆづるべき年の

且

我と世をのがれん身にも初日影

露童が家嗣佐太良(郎か)の

筆意常ならぬを祝して

天みつととつて七ツの古書かな

陶水瓶といへる物を、まさ

二がめぐりける年の且

日の匂(ひか)小瓶に椒酒花ぞかし

病中

梅柳はつ春の眼たしかなり

新居もとより爆竹を入ねば、

春のあらまし又いふにやお

よぶ。

元政の松もかざらず老が門

人日

葛飾に知人いくら梅わかな

朝の間に摘てさびしき若菜哉

隣くうしろも隣なづなの夜

七種のそろはずともいね哉

蕎麥餅の釣場をおしへけり

粥草や葛飾舟の朝みどり

うち囃し馬も嘶よ蕎の夜

葛飾の蕎麥なつかしき今日

や、いやが上の白妙に、杖

のみちもさだかならねど、

更科川のさらくると潭邊に

をりたち、杖をぬらさんと

す。折から投ぜし文の奥に、

見せばやなこれぞ信濃の雪

若菜と一句にそへて鳥淵

坊が一簾をめぐみたるに

大雪の旦若菜をもらひけり

掛り舟岬のまつに子の日せよ

霞

國にそふ霞をはこぶ潮かな

遅日夢去て時とへば遙にこ

たふ

かたくの鐘聞に霞める寢覺哉

醉さめや嶋を見こしの波かすむ

二またになりて霞める野川哉

菴崎にて

うすみのや夕越くれば雨かすむ

より所なくて遠しや野のかすみ

梅

梅おりに舟よぶ多摩の渡かな

馬の子の家にかへるや梅寒し

逆台嶽

捨氷院の梅さかりなり

朝夕や何れとならば夜のうめ

梅が香や餅ひつかけし釣の糸

宿の梅といはるゝ宿よ松もよき

ますら男の梅が香袖に射矢哉

うき舞のひと葉なりとも磯がくれ

おもひなかけそおきつしらなみ

磬鳴て梅おらんこゝろうせてけり

富家も乏き家もうめさきぬ

夜の梅寝んとすれば匂ふなり

閏月ありける年

加はれる睦月の梅花郁々たり

梅ゆひし薬假その(めか)のにほひ哉

うちひらけよき日あたりやうらの梔

酒たうべて病に懸べしとの

玉ひける醫師の家にて、傍

人に申。

ひとゝして酒のみならへ夜のうめ

初寅の日、人々春おろし句

つかうまつるに、都の友を

思ひ出て

便せよ麓はうめのくらま山人にものおもふ顔なき里の梅

武野天満宮奉納

むさし野に松梅多きところ哉
麥のたけ梅紅に春ふけぬ

柳

やなぎ風に裏おもてなき時節哉
おもふ柳見にゆくころとなりて
日永きや柳見て居る黒格子
眠るかと鶴見て過る野の柳
正月の霜ふりこぼすやなぎ哉
月遠く柳にかゝる夜汐かな
梅やなぎうめうつろひて青柳か
暗うつ門に暮行やなぎかな
夕汐や柳がくれに魚わかたつ
形的の矢落の柳しづかなり
柳なをしりぞき見れば緑なる

つばき

鳥の猪白玉椿きはづきし

葉おもてにかまくら椿咲にけり
飽てたゞ鶯の吸花つばき
なか／＼にはや散つきよ赤椿

木の芽

けしきたつ谷の木のめの曇かな
世の木の芽ころ鞍馬にかよふ哉
桐もやゝ鰯目角も芽をぞふく

鶯

飛鳴に鶯の機嫌しられたり
うぐひすにすぎなき晝のかづら哉
鶯に圓すこしある屋敷かな
鶯のしら目にふくむはつ音哉
水あびて鶯となき脊はらかな
横に日のうぐひす見こむ書の小口
かならずよ鶯きかばやまの入
鶯の胸毛をこぼす春みなみ
うぐひすの今朝たく柴にとまりけり

蝶

蝶とぶやあらひあげたる流しもと

袖に來て袂にきへつみちの蝶
初蝶と見しより數の野づら哉
はつ蝶のちいさくも物にまぎれざる
酒くさき人に蝶舞すだれかな
から蛙にてふ舞臺の厨かな
二羽になりて蝶かへすなる野中哉
夕風や野川を蝶の越しより

猫の戀

猫の戀六日年こし更にけり
氷ふむ猫やゆく／＼戀死ん
このほどやうとくなりゆく猫の妻
戸をあけてはなちやり鳧猫の戀

蛙

酒星を見に出て蛙きく夜かな
瞬やあしたの小田のかはづども
はつ蛙水にはなかね夜聲なり
脱すてしみのにをかしき蛙かな
起ふしに床の臺追やもめかな
飛ちがふ蛙くらしや雨の囁

田螺 蛭 蛸

田にしわる野口の姫のにくきかな
苞の田にし田へ戻すべう雨をなけ
土舟や蛭こぼるゝ水の音
泥はもとの海へ目指のあさり貝
われがちに數あるものを蛸とり

蜂 蛭

木ばさみのしら双に蛸のいかり哉
蜂の巢も人たのめなる軒端かな
馬は眠犬は追なる門の蛇
舞すくむ虫や地にそふ影久し

春の雪

あれなるが安房の蛸か春の雪
春の雪しきりに降て止にけり
海に見ん春の白雪地にあはき
とりさがし門にすさ切雪解かな
朝駒の朝川わたる雪解かな

春の雨

海はれて春雨けぶる林かな

春さめのこゝろながくも降日哉

春雨や小桶にかづくかす小鯛

おもひ絶て梅きる宿に春の雨

鴨立澤にありしころ

春雨や傘さしつれし演社

春の風

はるかぜや吹れそめたる水すまし

うら若き川原蓬やはるの風

濱つとや歸るさをふく春の風

齒の鳩にて

春風や潮に手あらひ口そゝぐ

はるかぜに吹るゝ鶺鴒の照羽かな

春の日

柏木の権門が藤をとんと

けたれば、まりは枝にと

まりつゝ、花はちらりほ

らりと

春の日を音せで暮る簾かな

酒店

簾戸に鯛のこけちる春日哉

春の日や刀あづかる原やしき

長閑

のどけさや津く浦のおもはるゝ

長閑しや麥の原なるたぐり舟

遠干潟ふねのみよしの長閑也

ながき日

永き日や鶏はついはみ犬は寝る

うす曇同じ空にて日の永き

晝寝のくせを自はちて

永き日に我と禁するまくらかな

也夢禪師の消息に酬

ながき日やみちのくよりの片たより

みちのくやいく關の戸を初便

二日食といふとを

母戀し日永きころのさしもぐさ

かげろふ 糸遊

天眞禪刹

陽炎やしづかなる日の數かはら
かげろふや一摺づゝすさではら

陽炎のもえて地にたつ松葉哉
糸遊にほどける艸の葉先かな
いとゆふやものによらねど角櫓
糸遊に兒の隣きやさしさよ

紙 寓

舟にあげて舟ふりかはる八巾
八巾空見てものはおもはざる
いかのぼりきれての後の風ぬるし
たこみつよつ山邊の長が夕詠
夕ぞらや八巾見に出し酒の酔

初 午

初午や七ツの年のくゞり道
はつ午や假そめゆけば七ところ
初午の日和は梅に柳かな
はつ午や小旗をつかむ舟上り

病 後

はつ午や梅見ぬ年の梅を見に
初午に痘瘡かろき世なみ哉

涅槃會

巢のつらも佛のわかれかな
ねはん會や往來の人をひまの駒
涅槃會や身は寺入の穀つぶし

鶴の林を思ひ合すもことふ
りにたれど

磯なれし松も見らるゝねはんかな

老ゆく身を獨ごちして

去年より今年佛の別かな

彼 岸

吹つれて梵論も彼岸の歩み哉

山邊には桜の芽を摘ひがんな

西行忌

捨がたき妻や子や兵衛尉

と聞へしも西上人ときこ

へしも、たゞかりそめの

名なる事を

花に死んねがひは欲のかゞみかな

みだり世に生れて世をや花の陰

出代 家婦入

出かはりの酒しゐられて泣にけり

やぶ入や桃の小みちの雨に逢
出かはりの一日にせまる誠かな
筑波根や世のやぶ入か遠霞

莖

なか／＼によき衣はちよ野の莖

菴にうつる日

春どの野にのみ見しをつぼ莖

末黒野に咲ずともあれ莖艸

行や我すみれがくれの濱雀

菜の花 くゝたち

病後の吟

野ごゝろや筐の小菜の花を見て

かさね着や菜の花かほる雨あがり

菜の花のほひは甘くにがきかな

茶店にて

摘そへよ膳のむかひの鶯菜

莖たちに春の地勢を見する哉

井のもとや莖たち摘ん寺泊

燒 野

山焼やほのかにたててる一ッ鹿
越わびて淋しうなりし焼野哉

前書略

山焼や有情非情もとの土

春の舞

一色にいろ／＼ 艸の青きかな
舟かけて草の青きを春の人
若艸や葉にむすぶ古すゝき
うら／＼と草はむ春の野鹿かな
萍や生そめてより軒の雨
艸の戸や更行春の青かづら
鹿みちや藎に交りて蔭の蓋
おもはざる瑞籬の内ぞふきのとう
うどの香や岨に下駄はく山の兒
たんぼゝに東近江の日和かな
石原やくねりしまゝの花あざみ
めぐる日や指の染までわらび折
早蕨や一日路ならつくばやま
ふせ柴の十日たちしをつく／＼し

聞からにしりぬ杉菜は土筆
杉苗に杉菜生そふあら野哉
水のほどとく角ぐみしかきつばた
野の窪み水うちふくみ茅花生
埜の鵬つばな月夜といはまほし
出ばやな籬が野邊の麥路に
菀豆やたゞ一色に麥のはら

苗代 種おろし

鴈は歸鴨はいづこへ種おろし
いとまなき世や苗代の薄みどり
行水や苗代小田にせきそむる
水鳥の歸ていづこ種おろし
苗代のかけ水はかる五十串哉
なはしろに鴈追るゝ磯田かな

雉

雉子の尾の飛さにみたる野風かな
きじ啼て嵐の野土けぶるかな
日や暮る尾をうちかひて枝の雉
鹿垣に番かけ込きゝすかな

もがきてや爪根あらはに網の雉
羽やたゞで峽の橋ふむ夕きゝす
山里や馬槽にきじの歩みよる
瘦てたつ春の行衛や岡の雉子

歸鴈

歸る鴈みな菱喰に見ゆるなり
我こゝろ聲せで鴈のかへれかし
追聲のうしとや歸る小田の鴈

ひばり

明星やしめ野のひばり巢にぞ鳴
たつや雲雀すこし舞そふ濱雀
やぶかきや野越せうものひばり鳴
地蜘蛛ふて追そこのふてたつ雲雀

つばめ

軒燕八聲の鶏を聞おらめ
人住て燕すみなす深山かな
はしり帆の帆綱かいくゝるつばめ哉
巢乙鳥の下に火をたく雨夜かな
つばめ舞宿や日高に高木履

巢燕に雑巾かけし柱かな

鳥の巢

鳥の巢の明れば暮る日数かな
巢つくるやにくき鳥も親ごゝろ
巢鳥落ぬ木末にかへすよしもがな

拭ひ椽に塵をおとす罪あり
て、こらいへかゝるぬ家の
子が、もろ手を指入、さし
もに厚きわらの圍を落した
る夕

巢はあだに軒の雀の聲高き

うそ

照雨や溜をめぐれば鶯の啼
鹿垣にうそ啼里のやすみかな

春の鳥

淺間山つなみせしあくる
年、その麓を過るとて

砂ふるへあさまの砂を麥うづら
馬峯に舞入春のすゞめかな
足緒はゆるしら尾の鷹の後哉
物おもふ人に駒鳥鳴暮もがな

曲水

曲水はとても日和のゑんならん
きよく水やまさに小貝の蛸むすび

上巳

桃の日や下部酒もる蒸饅
句はしや誰しめじ野のよもぎ餅

雛

紙雛はあるがうへなるみやびかな
蠟燭のほふ雛の雨夜かな
なにがしの一女に對して

綾にしき雛にあやかるこゝろかや

彌生一日一女まうけし人の

許に

みなあらた産家に隣る雛かざり
旅人の窓よりのぞくひみなかな

とくより春あたゝかにして、

桃櫻や、ちりかひみだれた
る三月三日を

世の雛にみな折とりそ遅さくら

桃

家あるまで桃の中みちふみいりぬ
里の桃蠶掃おろす日にあへり
うちそむき木を割もゝの主かな
崖の桃およひてもたぐすなをなる
あかつきや人はしらすも桃の露
かぎりなや堤より見るもゝの花

沙干

春干渴人の歩みのすぐならず
あと先の小舟をちから沙干狩
濱揚の牛はるかなる沙干かな
歩み來ぬ岬のなりに沙干狩

萬葉集の伊久里と聞へしも、

今日あらはなりけり。

ひや／＼といくり踏しる沙干かな

あまのまでかた、いざ此日

春の干渴に杖をたて、

馬刀串にあはれは馬刀のちから哉

花さくら

花とながめさくらとながめ日は暮ぬ
鐘つきを畫にかく花の麓かな
人戀し灯ともしころをさくらちる
行勞さくらぬしつく一木かな

洛にて

寺々を通りぬけけり花ざかり
をちこちの櫻に舐ふ筏かな
瓶に酒いづこはあれど家さくら

はりまの國わたらひせしこ
ろ

夕風や沙木のさくらちりやすき

花一河を隔といふ題にて

水かさや香をのみ花の口おしき
ちる櫻嵐に答ふことばなき
酒の科家さくらにて日暮たり
引あみの磯山さくらちるを見む

借屋戸神社

神こゝに控櫻も咲にけり
遠近やほのくさくら風ぞなき

香に花につままれぬ春を桃櫻
春のあらしちらざる花はちらぬなり
世はさくら門は鯛賣日和かな
奇(客)朽木戀

桧木に余所の花ちるうらみ哉

東嶽王のみあらか簪建ある
その始の日まいりて

地祭や松のひま又花のひま

人の奥羽に行をおくる

松さくらまかせごころのみのく敷

ひとへ山の邊にて

夕櫻夕越いさやひとへやま

道の爲には旅行をすゝめ、
酒に對しては杯をかくし、

老がいのち長かれと切を盡
せし保吉先生なくなりて忽

三歳、正當日の今日、北總
和鶴亭にありて、亡がら埋

し一字、遙に情心こがれ飛
思ひを

榎寺も雨の降かに花のあめ

兄の七回忌にはるく節曳
つゝ奥城所拜みけるに、七
とせの昔は只おもかげにの
み、初喪にかはらぬおもひ、
我人にのみありて

ちからなき旅して花に墓参

梨花 辛夷

花にけぶり軒の嬪なしと詠りけり

朝雨や簾ごしなる梨の花

雉子一羽起てこぶしの夜明哉

木末踏みちに辛夷の白き哉

山吹

山ぶきを喰折春のからすかな

根をたゞで山吹ながるかけ樋かな

山ぶきやあたらかざしのから車

やま吹にくちなはを追旅人かな

つゝじ

大和のくにわたらひせし
ころ、高取の城ちかきあ

たりにて

山城や紫つゝじかぎりなき

片岨のつゝじとぎるゝ巖いはは巖いかな
今さらに薦あさましや岩つゝじ

藤

藤咲や鵲うぐいの臂も末の春
物がたり讀さして見る藤の花
藤さくや人もすさめす谷の寮
月かすかに犬などがめそ夜の藤
しら藤や月ほのかなる山の兒
筏くむ夕暮藤の落花かな

鹿の落角

雨の降日にひろいけり鹿の落角
影や見る水やのむ鹿の角おちて

暮春

ゆく春や鄙の空なるいかのぼり
葉櫻に山こゝもとのほる深し
明日よりは身を夏旅の今宵哉
已下不分題

先ゆくも歸も我もはるの人
餅酒に慍うんじて春の野づらかな

美しや春は白魚かいわり菜
こりずまの世に掣ありて水祝
春の水藻臥の蜷も得たりけり
風ひとふき酒にけぶれる松の花
松の花柳の花は手にもとる
庭中にあるじ酒くむ接穂哉
古き代のみちのく紙やかみかいこ

圓光大師御忌

遠護智恩院の鐘かすむらし
煤ちるやはや如月の臺所
鴈小屋のあらはになりぬ別霜
簀市に誰ゝみのを春の雨
逝し兒を生殘る我をなげく哉

保吉を悼

三月三日、この人のうせ
し日なればこゝにひらふ。

聖護院御奉入、此春ありし
と人のいふに

峯入やおもへば深き芳野山
みね入や篠にかぶるゝ道ありと

師の單忌、鴨立澤にありし
頃

おもひ出てさし木の五加木ごがき摘日かな
淵の水深きはふかくぬるむ哉
春の月山椒の皮にむせてけり
臘夜や誰か寐て行鹿島舟
烏雲に入て松見る渚ささかな

春詠都三百二十句

白雄句集 夏

白雄句集卷之三

夏之部

更衣

元日の舊服、今日に至りてなを垢つきたり。しかはあれどもわが菴中俳諧にとめり。

更衣簾のほつれそれもよし
かへるさや胸かきあはすころもがへ
衣がへぬき簀の水ぞいまめかし
拾着て卵の花折んこゝろかな
馬とりの込に入りころもがへ

碩布著

楚川がよき衣めぐみたるに

あたらしき袷に今朝のあさ日哉
綿ぬかんノゝとて四月二日かな
伊勢の留主に招れて

青簾

たがはじな此日を清のころもがへ
薄くれや酒けしめさる青すだれ
うら表おもてはわきて青簾

灌佛

雲の歩み水の行かたや佛生會
灌佛や門を出れば茶の木原

一聯二句

御父の名はおろ覺佛生會
御母の名は人もしる佛生會
灌佛や芍薬園を見すかして

夏籠

夏にこもるころは簾ひとへかな
鐘つきの妻にすゝむる夏花哉
何となく夏にいる人を見られけり

短夜

みじか夜や直宿袋のあげおろし
明やすき夜を泣兒の病かな

夏の月

みかき葉は椿なりけり夏の月
くちなはを踏しはたが子夏の月
町中をはしる流よなつの月

ほととぎす

起臥のこゝの夜待ぬ郭公
弓とりは弓持てきくほととぎす
夜の灯やこゝも佳よし時鳥

あはれさの鶏鐘が中ほとゝぎす

子規なくや夜明の海がなる

館の灯を待夜のちから時鳥

鳴たつ澤にありしころ

思ひよる門の榎やほとゝぎす

黒焼にせしは何もの子規

草菴に松櫺植けるころ

をとしくるはわが松風やほとゝぎす

碓氷峠にて

鄙曇かならずよ山時鳥

あたま入湯

有明や初ほとゝぎす櫓ぶね

朝みどり庫裏の窓より時鳥

馬に鞍こはたが夜明ほとゝぎす

品浦海安寺

江を探て似あはしの山ほとゝぎす

國中やかかけ時鳥厚木川

謝尚なら真似て告んに時鳥

啼らんと思ふ空八隅ほとゝぎす

鹿の子

八九間鹿の子見送る林かな

草の葉に見すく鹿の子の額哉

艸の原何を鹿の子のはみそめし

松魚

夜船とは偽ならしはつ松魚

夜松魚に裾ぬらしたる内井哉

三桃ぬしを携へし雨石老人

の東武行は、やよひはじめ

になん参りあはせて、むま

のはなむけせしが、ともに

長居の老人は江戸に、我は

しなのに、此日井々亭をと

ひて、略盡べくもあらずな

りけり。

閑古鳥

囀くさめ囀ほとゝぎすはつがつを

なけば啼ふたつの山のかんこ鳥

閑古鳥世は山鳩も啼頃か

白檻を花に啼かもかむこ鳥

しづかさの啼もそこなはず鳴鳩

閑古鳥啼林より落羽かな

牡丹

園くらき夜を静なる牡丹かな

散さまや牡丹のぬしの物いまひ

牡丹花老人贊

牡丹袖に連歌戻りとしられたり

燕子花

三河の國わたらひせしこ

ろ

古道のかきつばたとふ日ぞ長き

雨のほどけふを葉のびの杜若

雨に人たちもとふるやかきつばた

芍薬

芍薬や四十八夜に切つくす

苔なき芍薬園となりにけり

若葉

人の京にゆくを送る

世はわか葉氣相のわろき日はあらじ

見ありきて先問柳の若葉哉

國ゆたかに見ゆる若葉の關路哉

若葉して瀧のありたきところ哉
樹々のこゝろ若葉に逢し氣色哉

うのはな

むかばきに卯花かゝる雨くる(らゝ)し
うの花や笹を見こしに夜の海
神とりうの花を折兩部かな
卯の花や折ての後のうら表

青あらし

かしは山夏の嵐をうち見たり

馬門亭

人の知る曾我中村や青あらし
沙川や梢をあはす青あらし
山の邊や天蓼拾ふ青嵐

器栗

花げしにくんで落たる雀かな
けしの花見て居るうちはちらざりし
花げしやうしろさびしき階子賣
器栗の花十日たちけり散にけり

竹の子 わか竹

竹の子の葎の雨をかうぎけり
わか竹や牛のゆく筋あらしふく

甲斐しなゝ國さかひを過
るとて

白檜や窓竹原はわかばせし

紫陽花

あぢさゐやかれにうらやむ花あらん
紫陽花のすぐり寄たる苦かな

鳥醉居士之墓

あぢさゐのかはりはてたる思ひかな

水神

實相無漏の大海に五塵六
窓の風はふかねども、隨
縁眞如の波のたゝぬ日は
なし。

藻の花やみがくれてだに風さはぐ
水たゝへて水草うつす小沙彌かな
東餅の刈藻にうごく門の月
うき草や同じ嵐のうき根茨

橘

老ふたり花たちはばなに醉泣す
腐橘にかたちつくりす夜の軒

さつき

母の五十回を奠るも、た
だに命ありてよと身のつ
つがなきを歎ては、乳房
をしたひし恨も散するば
かりに

をぐるまの死なで母吊ふさつき哉
緑毛龜の蓬にこもる五月かな

五月雨

假そめに降出しけり五月あめ
八專のうちぞともいふ五月雨
五月雨やひと夜嵐のかへし雲

さみだれは時雨むらさめ夕立の
そらのけしきをつくしてぞ降

五月雨の音を聞わくひとり哉
もたれあてみなもろかづらさみだるゝ

草菴客をととむ

君しばしさみだれの中の夕立ぞ

軒端の松の、雨に嵐に

みどりうしなひたるを

さみだれや枯なん松に普門品

入梅

焚火してもてなされたるついで

入梅の明遠かみなりを磨かな

入梅のひま鼻とをさるゝ轆かな

端午

やすみしろしめすみつば

四つばの殿づくりのため

し多かる中に、此日あや

めのかづらかけざらんも

のは、宮中へ入をゆるし

玉はずと也。是に倣はは

ばかりあれど、佳節のホ

句せざる者は、刑罰を訪

となかれと蔵て

かはるゝ五尺のあやめ袖にせよ

軒あやめ市に牛かる思ひあり

塩竈にさうぶ葺居る童かな

家にながき根ふきわたし

て寝めくもの持ありくに

ぞ、深田の柏葉も時に逢へ

る此日なるべし。

篠かしは葉どに露の節句哉

草の戸や粽をほどく夜の露

長く」と脇にかけたりあやめ賣

菴の作事半なるところ旅に在

て

小菖蒲に素建の我家なつかしき

さうぶ湯やさうぶ寄くる乳のあたり

世をまゝに隣ありきやさうぶ酒

麗水堂に朝祝の酒、よきも

のさかなあざらけきをたう

べて

いざやとて爛酒に交し菖蒲酒

世はあやめそけてひと日は花かつみ

むつまじのあらむつまじの軒あやめ

くらべ馬

鬚づらは老もわかすよくらべ馬

むつまじきつねをば何とくらべ馬

火串

思ひよらぬ哀を見るも、

うき旅のならひならず

や。

もえさしの火串に鹿の血かな

火串ふつて獵矢をそゝぐ小瀧かな

獵の男が弓、蜘蛛の網、とも

に飢をたすからんばかりぞ

にこそ。蜘蛛にけふの糧を

たくはひしかば

命毛やわれは網せず照射せず

田植

伊勢にて

御田植の酒の泡ふく野風かな

捨苗や田中の菴のはいり口

鼻の子を野水にうつす植女哉

早乙女の装かけ柳年経たり

早乙女のうしろ手しばし夕詠

木のもとや松葉にちぎる田植酒

早乙女の葛葉ふみこむ山田かな

青田

傘さしてふかれに出し青田かな

編 蝸

かはほりの夕を宜蟻がつゞみ哉

蝸 牛

かたつぶり落けり水に浮もする

山齒朶や寸にあまれる蝸牛

煤芽にすゝけておかしかたつぶり

蜚

飛やほたる夢人を訪夜の露

むら松やきえんとしては行螢

夏は夜と汝がとか飛ほたる

蟬

松の木や今日は朝から蟬の鳴

夕蟬の筏木に鳴ふもとかな

蟬鳴てくるしやみのゝむらかはき

蚊

蚊遣り火のけぶりの末に鳴蚊哉

竹切て蚊の聲遠き夕かな

しばらくは高きまくらを藪の月

蚊のさすや蚊火種ひらふ指の股

蚊に酒を吸さん夜半か蚊屋の月

ひとつ帳に僕も朝寐の枕かな

下京やかやりにくれし藍の莖

子をうしなひたる人に

蚊屋の月亡子かへせと泣おらめ

夏の虫

油火に蚊とはいはずよ夏の虫

水 鶏

艸しげみくいなの道に鎌入ん

遠近のいはぬ夜を啼水鶏哉

鵜

鵜の笊に魚とりなをす早瀬かな

數の鵜に鵜匠ひとりの目面哉

かはせみ

翡翠の筑波おろしに吹るゝ鴈

中絶し橋を翡翠の小楯かな

水 室

世の貢多かる中に氷のみつぎ

雪の中の筈より、水無月の
貢、^{つげ}閑鷺野と聞も遠きにあ
らず。

朝日の御内わたりや夏氷

雲の峯

雲の嶺白きはうそのはじめ也

雲の峯きのふに似たるけふもあり

川 狩

川狩や鱒の腮さす雨の篠

川がりやその夜くの月四分

涼

ゆかしとや人見む合歡の下すゝみ

すゝしさや藏の間より向島

梳る人もありけり門すゝみ

すゝし江に鱒をうつ竿の露

蜀黍のもとにかたるふ涼み哉

しき^{あき}海や杖一節の海すゝし

舟行まゝの富樂、市街にか
くれたるを

うしろ涼し筑波はかくす家もなし

舷かたはたに蓼摺れいずり小木や夕すゞみ

簾

たかむしろ酒したむ事を禁じけり
行水にうちまたがせよたかむしろ

扇

片手綱馬上に扇見事なり
明てしれ淺黄うちはに夜の露

蒸風

唐人の畫に

風かほれ唐とやまとの墨の色

虫干

虫干や菴に久しき松ふぐり

暑

日の前の浮雲暑き蔭かげりかな
猶暑し簀干の魚にはこび雨

悼鬼石

此界は暑しととの眠ねむりかや

麻

麻刈の麻きぬあらみさればこそ

夕立

夕立や流れ出たるむもれ水
風そひて夕立晴る野中かな

清水

蟻のすむ数さへ見ゆる
とは師が遺章になん。さ

るをこのほど滞留なす福
正運社に、一筋の流いと

清きあるを

朝夕や戀る清水の蟻むすび

何なりと一木ありたき磯清水

祭

兒あふぐ扇の箔もまつりかな

樹く深く祭のあとの野曲突哉

夕顔

ゆふがほに阿兒あにと呼子は女なり

夕顔や花の上なる籠り堂

窓のけぶりすけの花と觀じけり

葉がさねのひさごの花や石の露

夕貌や花の爲とてうえはせじ

晝がほ

晝がほや日のいらくと薄赤き
ひる顔やわかちて擔ふ魚の露

蓮

白蓮に夕雲蔭るあらしかな

或ひとのもとに荷花ある事
を

夙に起て蓮見ん爲ぞ夜訪し

瓜

萆ながら都へなどか初眞桑

瓜の香にきつね噺はなむ月夜かな

祖師堂にふりの香籠る疊哉

御被

たごころ門の流も御被の夜

雨にあひて

海川や御被のあとの雨の聲

賀茂より七條の僑居に歸る
に

川ぞひを戻るもよしや御被の夜

簪けしてそれも流すか御被川

不分題舞木

くるしくも雨こゆる野や夏蕨
訪ぬ人も葎の宿にかぞへけり
蟻のより釣鐘草のうつぶせに
山百合や齒菜の間より一ツ咲

熊野路にて 三句

慈冬^{むつふゆ}の花うちからむくまで哉
濱木^{はまき}綿の花はいつさく夏刈す
西日さす濱は柴胡のしげりかな
むら雨や見かけて遠き花樽
梅熟す折にふれたる疊かな
葉柳の寺町過る雨夜かな
岩はなや旅人^{たびじん}勞ていちご食ふ
花柚水にうかべて晝の簾かな
歩み來ぬ早瀬はあとに夏木立
下闇や椎の葉がさね艸もなき

桐壺の贊

桐の花^{つばき}翳^{かげ}のすだれ猶あらん
山高み、二國の境に立せ玉

ふくまの宮拜み奉て歸るさ

や、盤桓すれば上毛、流龍

すればしなの、山々、眺望

ひまなき至景なりけり。御

愛樹のもとにたちて

かみつけや級木はしなのにしげみけ

葉櫻におくれ詣のこやたかな

合歡の木かげ人も日にく夕なり

不分題鳥

大樹公の御船うかべさせ給

ひしは、きのふと聞、綾瀬

川にて

鷗一羽御狩にもれていく程ぞ

不破にて

松風や關はむかしに羽拔鳥

とやたかといふ事を

鷹に聲なし雨にたれたる塙筵

ひとしきり竹に柳にぎやうく子

すさまじや雀の堯^{たう}あらしふく

都々鳥や木曾のうら山木嶋に似て

沙鷄の聲人あきちかくなりけり

蚊食鳥とてもくらはどみなくらへ

雜題

木瓢より舟を浮む

舩や年は四月のわかれ霜

笹ごしに青さし匂ふやどり哉

凶年を悲みては膾炙口に苦

く、有年を悦ては雜食口に

甘し。

麥の青さしをしいたどきぬ掌

旅人に旅びと見せよといひ

けんも思ひあはすの折か

ら、紀枝なる者青柳を携來

るに、我人興に入て

冷し酒旅人我をうらやまん

なき母の爲とかける笈摺の

うしろさま、いとあはれな

るに

夏旅や母のなき子がうしろかげ

夏詠都二百二十八句

白雄句集 秋

白雄句集卷之三

碩布著

秋之部

立秋

梅牡丹萩おとらずも秋のたつ

馬買の小笠に秋の立日かな
はつ秋や片笥かけし舟ごゝろ
草よ木よ今朝秋たつと人の言

日に枯たる軒の小舳もいと
わづらはしきを、むしり捨
たるきのふは過て、花は覺
束なくも

刈草の葉はなはに秋のたつ菫

はつ秋や誰先かけし筥根山
秋立日雨の降り萱が軒

病後

つれなしや秋立ころのあぶら早

桐一葉

山寺の入相の鐘の聲どにけ
ふも暮ぬと入相の鐘、いり
逢のかねの聲ぞきこゆる。

鐘の聲かねの聲桐の一葉おつ
一葉二葉のちは桐ともいはぬなり

渡る瀬にあらしの桐の一葉哉
音すなり笥の口のきり一葉

うつけみの空敷からは残りけり
きへてあとなき朝がほの花

なにと見む桐の一葉に蟬の殻

七夕

七夕や桂に寄ば月落し

たなばたや蚤に目覺て夜の閑

ばせを葉に覺しほどを星の歌

宵くに馴しかこの夜天の川

天の河星より上に見ゆるかな

旅につかれて宵より寝、あ

かつきの星にかこつ。

なにとなく曇て星のわかれ哉

天の川野末の露を見にゆかん

星逢の濱に枕曳て天の川う

ちわたりしは、はたとせま

り一とせになん。老せまる

事このひまにも一むかしな
るを

星ひと夜昔にかへれ伊勢河内

萩が花尾ばな葛花

撫子の花女郎花また

藤ばかり朝がほのはな

秋海棠星七艸になどもれし

友なる雨石老人、七月七日

の夜身まかりけるよし告こ

しけるに、なみだこぼれて

星の夜を臨終とや空をうち見たり

露

酒くまむあまりはかなみ枝の露

土橋の露ふみこぼす艸葉かな

草巻閑

露かくのごとく窓より傳ふ律かな

朝露や砂にまみるゝむら小艸

釣人や聲だにたてず艸の露

むら露に艸のもとすへ見ゆるなり

露ちるや門の葎の籠つくり

題樂山子遣草露

なき友は一とせ先の草の露

稻妻

いなづまの衣を透す淺茅かな

暮ぬとて稻妻落す古江かな

稻妻や喊まざるゝ宵の門

いなづまの闇にかざらぬも哀なり

稲づまのおそろしうなる獨かな

いなづまやうしろはなせば江に落る

稻妻に匂をつけし魚藏かな

稻妻や障子さしたる虚勞病

いなづまや何れ隣家は淺間なる

稻妻やとゞまるところ人のうへ

世ははかな電光石火酒酌ん

秋風

朝六や誰も通らず秋の風

秋かぜや薦もたのます濱庇

吹盡しのちは草根に秋のかぜ

こもり江や嵐のあとの秋のかぜ

みちのく行脚のころ雨足山

にて

門に入れば僧遙なり秋の風

初あらし

夜半晴て砂利の高さよ初嵐

流れ出る埴土水や初あらし

雲笈

みな子なり靈まつ門に草葎

身に覆ふ齡につるゝ盆ごゝろ

魂まつり貧家の情ぞまとなる

旅中 二五

山かげや寐ぬをこゝろの魂祭

みの笠や我魂迎ふ宿は是

友なる鶯白が小萩にそへて

荒神をおくりしまゝに

盆ごゝろうきわすれ草えしかども

魂まつや柱さだめぬ宵の宿

たま待や石町の鐘のひどきさへ

魂むかへまち得顔なる我人や

市中にあれは見ありきて

先匂ふ眞菰むしろや艸の市

従弟どち月にかたるや玉祭

先師、品川の菴に在せし昔
なりけり。

むかひ火や上總へむけば月
が出る

かく古郷をしのばれし事先
おもひ出ぬ。我に師あり、
親あり。三人をさきにむか
ふるこの夕や、そとふく風
も身入はべる。去年の秋も
旅にありて、みそはぎの一
枝を五果百味にかへつゝ、
今年も信濃(濃)のくににあ
りて、人の田圃の早よねや
青そばや、手をれば麻がら
の筈も有。ちぎれば蓮の浮
葉もあれと、亡魂迎ふる旅
のあらましを

しばしもとなき魂やどせ艸の露
迎火はとりわけ婆の烟哉
袖や覆ふ雨の迎火見へざるは
むかひ火や父のおもかげ母の顔
土べたに辛子さめけり盆の月
魂むかひこゝろ碓氷を越る夜ぞ

この一句は師が身まかる
年の古郷行脚せし反古の

末に見へけるを

生身玉

うき我に誰ゝまつる生魂ぞ
塩魚の塩こぼれけり蓮の飯

燈籠

燈籠みなきへて梢の燈籠かな
露けしや高どう籠のひかへ綱
中庭の簾見へすく燈籠かな
うす紙の灯籠にてらす草葉哉
門守の油つぎたせ軒燈籠

跡

おどる夜を月しづかなる海手哉
ある人のまぎれて入しおどりかな

相撲

嵐雪がその唐にしき角力見ん
西東あはぬ角力ぞあはれなる
甲斐なしやうしろ見らるゝ角力
小手袖の昔にならへ艸角力

花火

知恵もなく絃てらす花火かな
川面や花火のあとの梶の音
洲の松のはづれをこゆる玉火哉
稻妻に花火はしばしたもつか
夜は秋のけしき全き花火哉

朝がほ

あさがほに瘧のおちし内儀かな
朝がほや垣にしづまる犬の聲
葬に簀干の魚も見て過ぬ
あさはものゝ朝顔の花もあたらしき

木槿

花むくけたつ日の早き思ひあり
めくら子の端居さびしき木槿哉

すゝき

雨そゝぐ岡の小家や花すゝき
猪をになひ行野やはなすゝき
空くせや尾花がすへの猪子雲
一むらの尾花あだし野のありさま

萩

七條の僑居に住しころ、
先のあるじが植置し籬が
もとの風情を

萩がきに萩咲そひしいほりかな
里うとし小萩が上に梢木つむ
もたれあひて一枝うごく軒の萩

芭蕉

露はれて露のながるゝばせをかな
ばせを葉やなにをちからに袋蜘蛛
やれ芭蕉こゝろ此ほどのぐさき

葛

壁の葛甲斐なきばかり雨悲し
雨の聲淺茅の小葛水こゆる
松がねの葛に身をする猪子哉
美しう葛はおとろふ人の秋

稻

おなじながら稻葉の露ぞ潔き
稻の花あらしの匂もはや過し
いね刈やのぼれば下る舟よばひ

粒々辛苦の種まく日より

雨風をいとひしころ盡し
を

かけ稻やあらひあげたる鋏の數

秋草不分題

さや川を下るころ

高水や蘆の白穂に雲おこる
あるが中に野川流るゝ女郎花
蔓艸のづんづと秋も二十日たつ

對門人

ことゝに我もしらすよ秋の艸
山ふかみちるか凋むか葛の花
きのふけふ葛葉にあらし吹とよ
蘭の香に老も若きも寐覺哉
立出て芙蓉の凋む日にあへり
この秋もわれもかうよと見て過ぬ

古寺烏鐘埋地といふ題

犬栗や鐘は穗長の地におちし
木枯や坪前栽も世のどく

きりくす

きりくす鳴止て飛音すなり

兩隣寐て月夜やきりくす

寐もおしき夜や木解にきりくす

蝙蝠に鳴かはしけりきりくす

きりくす繙きる姫にうたるゝな

我見しよ薯蕷を喰居きりくす

病中

衾ふんで霜の宿せうきりくす

ころろき

縣井やころろきこぞる風たまり

蟬や一夜宿せし齒架屏風

虫いろく鳴夜や宿にいとど飛

日ぐらし

とし四十蜩の聲耳にたつ

暮の雨日ぐらしも鳴すなりにけり

蜻蛉

秋の季の赤とんぼうに定りぬ

蜻蛉に波の蔓艸亂るかな

秋の虫

虫の音や月のはつかに書の小口

草むらも艸むらも虫の詫音かな
鹿道や踏れんとばかり虫の鳴
聲さゆる虫は何く銅だら

呻菴閑

我あみ戸締ぬけの虫をやどしけり
みの虫よなかでも秋のすがた哉

寐られねば、うき事ありて
枕になづむ。

夜ながさや所もかえず茶立虫

八朔

八朔や旭のいろをたゝへ潮
鷹飼も出したのむの田づらかな
食てはこ(屎)す世を八朔の日和哉
八朔のさぞ稻雀竹にさへ

野分

小夜中や野分しづまる夢心
水寒し野わきのあとの捨筏

霧

艸の原きりはれて蜘蛛の囀白し
窓のしの家霧のかゝらぬ日はあらず

霧の香や松明捨る山かづら
人戀し杉の婦手に霧しぐれ
秋ざりや蓑きるばかり降しきる
朝霧や晴るに間なき山のきれ

秋の雨

秋の雨あらしは宵の事なりし
蔭の葉や馬もくらはす秋の雨
敷藁や艸もえ枯るあきの雨

自他共白骨

野ざらしを見て通りけり秋の雨

なり瓢といふものありて、

風月のため騒人めづる、何

ぞ許子に荷騰(擔)せん。掛

磬室中雨瑟きたる日なりけ

り。さかづきをひだりに、

秋風の鱸魚を右の袂に、そ

のしたゝかなるを負もて來

れる客あり。かならずかの

坊にこそと、思ふにたがは

ざる括褌老仙なるを

浅からぬ瓢をいのち秋のあめ

待宵

待宵やひとりしぐるゝ蘆屋釜

ト者平澤氏、我軒つぎに

居をうつしたるを

晴曇月まつ宵のつたてよ

中橋と京橋との間に菴造せ

しころ

待よひや何れの橋に葉せん

駒迎 放生會

貫之の清水にたてよ駒迎

放生會この夜鶴川も月夜なり

松高し月夜鳥も放生會

月

姫捨や松島やこよひ菴の月

名月や真空になりて露くだる

名月や建さしてある家のむき

名月や夜網引かの芝さかな

楓捨や松島や廣澤や石山や

須磨や明石や黒戸のはま、

むさし野はほかみ、清

き清ははるかなりけり。

名月や眼ふさげば海と山
名月や降らば降とは常の事

雨塘が午明様上

月ひと夜出汐の森は忘れざる
澤竹におもひぞとどく江の月見

長傳老禪師の腰室に遊ぶ

世は八重に捨し主と月こよひ
網引せし跡しづかなり浦の月

宵のほどくもりしかば

月にそふ雲のみわたにあらしかな

良夜雨

おもへとや月満雲の底あかり

多摩の横野ちかきあたり

宿かりて、五歩十歩月のか

げわづかにゆきゝして

野を暨に野を横さまの月見哉

迷懷

今むかし月はしらずも澄夜かな
照月の月やうらみん夜蛤

人々清光をいふが中

名月や闇て琴かる隅兩
月こよひ爲にとならば竹きらん

陰晴さだかならぬこよひを

訪れる人々に對して

月に凝月にほどけんこよひ哉
名月や蘆のひと夜を蓬痺

舟もよひなど聞へしも、お

ぼつかなき空のやがて雨降

出ければ、我菴に頼の客ま

うけして

爰を舟とおもひ給へや雨の月

月晴なん雨に傘せて客來けり

榮路山暉同舟、深川五本松

にて

秋涼し月見をちぎる松がもと

良夜蝕の夜雨

蝕に雨に二夜の月を年ぞかし

月に影杳かむ駒のつかれかな

畫賛

名月や影四ッ橋の橋ばしら

春鴻が信中へゆくを送る

月姫拾目出たき影をいのるなり

貞徳老人の天靈絨の枕は名

だゝる風流にこそ。をのれ

病ふにふしてこの夜床をは

なるゝ事、わづかににじり

出たるのみ。

まくら肱に膝にせんかな月ひと夜

その名だゝるをむさし野に

かぞへて

をしかけやむさし鐙や月すゝき

既望

雨の聲いさよひの宵寐友あらん

くらぶ夜やけしきばかりに月かけし

雁

秋既に鴈の行かふ江の月夜

初鴈やみつよついくら山のきれ

らなひ子どもうた唄ふを

きゝて

かならずよ跡なる鴈が先になる

あの男ゆかばたつべし小田の鴈

浅茅が原にしろべありて、

そこにひと夜を

鴈が啼君が四阿關屋かな
しら濱や落さま影を月の鴈
番鴈の面に風ふく蘆間かな

きぬた

しろしらぬ里なつかしや小夜砧
相撲取も閑居る宿のきぬた哉
人や住桃のはやしの小夜ぎぬた
遠ぎぬたこの川越ん橋もがな

浅茅が原

閑き夜の紙ぎぬたさへ秋ぞかし

早稲酒

早稲酒にものゝゆかしき在郷哉
早稲酒に垂打ばかり酔てけり

鳥 籠

山畑や筑もむしろもをどろかし
同じこを添水の縄や人の上
落る日に影さへうすきかくし哉
日もなげにをどし作るや月明り

虫送る夜や先にたつ鳴子引

うづら

網の目やうきあかつきを鳴鶉

土佐光廣の畫に

鶉日にうれしさこぼす罷かな
しらす我番て見ぬを片うづら

鵒

漆掻あたまのうへや鵒のこゑ
藪かけや卵のからに鵒の啼

鳴

鳴たつて暮の焚火のもる夜哉

鳴たつや凡夫家路のいそがるゝ

夕鴈の浅瀬にたてる一羽かな

人稀に鴈啼て我夕かな

木 實

秣栗の蓑にとゞまるあらしかな

蒺藜や芥おしぬぐふ山がらす

牛の子よ椎の實跡にはさまらん

枝の柿鳥は追はずさりながら

尾長啼蒺藜原の雨氣かな

戸隠山にやどる

蒺藜にしのかかねてや猿の啼

菌

茸がりをうらやむ旅のつかれかな

紅だけに山口しるき芝生かな

打枕に毒ある菌さくきかな

伐株や米かし水を茸つくり

なつかしや楓苗ふくきのこ山

三味泉(線)に松のかづらや菌狩

露時雨

ものゝ音秋は露さへしぐるゝか

火ともしの何もかぶらで露しぐれ

露時雨しぐれんとすれば日の赤き

秋の魚

山風や世を鮓小家の影ぼうし

さだめなや尾つれの鮓の死所

落鮓のあはれや一二三の築

石おこす人をやうらむ鰯鳴

紅葉

浮雲の紅葉に晴る尾上かな
暮さむく紅葉に啼や山がらす
夕紅葉この川下は薄かりし

伏龜が眼病を

秋は紅葉眼にはれよ霧はれよ

正灯寺

門に入て紅葉かざぬ人ぞなき

後の月

不二晴よ山口素堂のちの月

老きはる人は誰々後の月

後の月宇陀のむかしはいく昔

台獄の鯨音、風翔て夜みな

歸りぬ。室中の甕いまだ盡

ず。

關てひとり見まじきは月の名殘哉

江都のならはし、かならず

蚪蛤を賣歩行にぞ

はまぐりはそだぬものよのちの月

草菴の隣に、黄なる聲のもの

のしりのくすしをはしけ

る。素堂老人のふる句と、
人いはよいへ。

もろこしの書かた寄よ後の月
後の月わきて古人をおもふ事
へだまりし人も訪けり後の月

旅中

後の月稻垣低き宿とりぬ

むさし甲斐が根行脚せしこ

ろ

山ひとへ二夜の月や甲斐武藏

秋の夜

秋の夜を小鍋の鯨音すなり

長き夜を葉手れに摺る軒の石路

傘に鼠のつきし長夜かな

燃しさる火や細ごゝろ夜半の秋

長き夜や磯の匂ひのものにつく

秋の夜や秋のあはれは晝よりも

建仁寺の鳧鐘は、子の刻に

ひとつをかぞへ、陀羅尼よ

みく卯の刻を百八の数の

おはりとす。ほとゝぎす啼

ころすらましてかなしき。

秋の夜や忘れさせては陀羅尼鐘
身ひとつはかねて夜寒の枕かな

憂小夜あらし、うすき蒲團
を透す。

うぶ髪の古郷遠き夜寒かな
思ひ侘ころは夜寒の簀垣哉

病中

ちぎれくもの思はず秋いく夜

鹿

牛の子の鹿見て逃る月夜かな

閑にたへて酒酌ば月鹿も啼

鹿の跡見よや葛葉のうら表

聲くらし晝はわかれて鳴鹿か

行鹿の萩にうたるゝ野風かな

追るゝとしりつも啼か畑の鹿

絶すしも濱へ下りしか月の鹿

山家にやどりて

鹿啼てまことがましき旅寐哉

次の朝小萩がもとに杖をたて、

曉がたに聞し鹿かも蹄のあと

江都にたらぬものなしといひけるに戯れて

花紅楓江都に鹿啼山もがな
里の女の木履をかしや鹿の啼

菊

僕ひとり持たれど風塵中に栖ゐたるを

宿の菊と名のるよしかな田三反

黄々白々粧束罐

菊咲て花ともいはぬあるじかな
きくの香にそむく心もいづるなり
酒造る隣に菊の日和かな
白菊に北の御園は暮にけり
黄に咲ぬ酒卸ゆく門の菊
殊更に作らぬきくぞ九日なる
醉臥は何の夢見ん宿の菊
養菊の老はとく來れども、

艸惹わづかに履ぬぎのみ。
この日客あり、客に對す。

菊提て君老をとふ姿なり

何某の官何がしの君より給ふ佳節の菊は、紫句へるうすぎぬうちかけて、なか／＼に隠逸のきたにはあらず。けふの御遊も思ひやられて

曉や菊の露ちる御幸町

この日の菊、瓶に満りけるをよることびて

艸の戸や隣／＼のはこび菊

勢南一葉菴にありしころ、さかりなる桃の一枝を恵れつゝ、けふの花にさしそへて酒酌けるに

桃に菊けふを廬生が現かな

台獄にて

僧が供地すりに菊を提し

病中

菊や咲我酒たちて五十日

露の音菊の障子にこの月夜

雨蕭瑟たるばかり、處明山人に訪れつゝ席上の作ありて、はからずも一軸一瓶の稱嘆にあふ。酬にと葉なし。薄酒の興をまうけて

菊の酒にちからある日の雨寒し

梅もどき

城うらや小さき牛に梅嫌

梅もどき花屋の柳哀れなり

梅もどきある人に花を問れけり

秋の暮

鶴をりて人に見らるゝ秋の暮

日の色や蓬ふかるゝあきのくれ

秋の暮髪生て人に問れける

鳴立澤にありしころ

澤蟹のあゆみさしけり秋の暮

氣のつけば馬も通らず秋の暮

わけもなや虫齒のおこる秋の暮

大寺や素湯のにへたつ秋の暮

蓬生や人に聲なきあきの暮
語れかし秋のゆふべの装作り

洛にありしころ、僑居のき
まかくのどしと、友どちの
もとへ申つかはす。

小 菜 一 把 薪 盡 せ し 秋 の く れ

行 秋

行秋に鱗のしら干哀れなり
ゆく秋やから板敷に風がふく
行秋の草にかくるゝ流かな
ひまの駒西へひがしへ行秋敷
鐘の聲ゆく春よりも行あきぞ
ゆく秋や情に落入る方丈記

已下不分題

秋日和鳥さしなんど通りけり
秋日和しるや河豚のつれあそぶ
羽をかへす雕鳩に萩の入日かな
秋篠に朝風わたる堤かな
いそ山や菜萸ひろふ子の袖袂

荒崗が崎を過るに

通し鴨入江の秋をまち得しか

觀世音たゞせ給ふ吉見の里
を過るに、さきの年師とゝ
もに一夜をあかしつる宿の
柱、處がらわきて昔のした
はれ侍りて

宿の秋我泣なみだあやしみそ

淺間山の烟いぶせくも、み
やはとがめぬと聞へしにこ
とかはりて山つなみとか
や、吾妻一郡の里く馬、
人流れうせぬと、追おひに
告るものありて、まぢく
略こゝるならずも、そこの
門人をかぞへて文の奥に

生はとく死は歴て告よあきの水

下毛無畏山普門禪寺眺望

階ひと歩く／＼に秋のけしきかな
蓑なるや聖かたしくあきの霜
大家に旅して鴈のわかれかな
鴈のわかれ未し／＼と老ぞゆく

病 中

冬瓜汁空也の瘦を願ひけり
葉生姜や手にとるからに酒の事

九月朔日伊勢御遷宮

今朝の旭はつ日に似たる御遷宮

同 四 日

奏 運 神 寶 さ ぞ 御 せん 宮

秋詠都三百二十八句

白雄句集

冬

白雄句集卷之四

碩布著

冬之部

馬巷に春秋菴ふたゝびなり
ぬ。詞友の丹誠大かたなら
ぬを、この日わが二翁につ
つしんで告す。

初しぐれ艸の菴にてはなかりけり
一袋松かさ得たりはつしぐれ
宿の時雨さつさ時雨とうたひけり
はつしぐれたがはぬ空となりにけり
草菴のさまを
しぐるゝや脚折しやせを爐にかけて

軒端の一本、やゝ二とせの
星霜を經たり。

松のほど時雨の桶となる菴
行しぐれ衰着て追んおもひあり
宵暗を時雨わかるゝ小舟かな
芝うらや時雨て歸る牛の角
時雨るや舟まつ岸の戻り馬
旅中
刀根の二瀬しぐれわけたる渡り哉
猪に誰かけられし夕しぐれ
しぐるゝや鹿にもいふ油つぎ

椎柴に間なき時雨のはこび哉
見てたつやしぐるゝ櫓角しやせやぐら
琴箱を荷ひゆくなり夕しぐれ
台嶺の鐵新に出來けるに

今年きく上野の鐘も時雨けり

よそ事にのみおもひしが、
罪ありて友なる車來が八丈
孤島にゆくを送とて

流人船實に時雨て見贈りぬ

十夜

年のほど十夜詣と呼ばれけり
檣賣家も十夜のともしかな

達磨忌

達磨忌に見やる經師が障子哉
達磨忌や寒ふなりたる膝がしら
達磨忌の口とりは昆布に山椒かな
だるま忌や吞ふみきりし宮根山

芭蕉忌

初祖正當日、ちかき友を招
く。今晩とのほかに寒し。

朝六や囃りあひたる納豆汁
月は花はけふはしぐれの翁哉
つぎ歌のこれぞしぐれの物語

元祿の正風を世にひろめお
こなはんとおもふもの、わ
れのみかは、すくなからず
といへども、ひろめおこな
ふにたらず。唯この翁にあ
るとを

霜ときへてきへぬ翁のむかしかな
元祿や見ぬ世語を降志ふし卷

去來あり、丈舞あり、其角
はいが山の嵐をうらみ、嵐
雪の旅行には不二をだに得
見ざりしと。すへあまんの
門葉、聲をあげ聲をのむか
なしみを、難波の蘆のふし
の間にこめてん。おもふに
むかし今月今日

この日數の故人をおもふしぐれかな
しぐれの句もて焚る事歳々

年々

時雨行日をおもかけの翁かな

也斐(寧ろ)禪師の庵に

松島をよく見て句なき翁かな

武野中毛呂の邑長橋寮の碩
布が、あるじして蕉翁とい
となむ日、行葉に藏したる
遺像を壁にたれつゝ、其徳
光の一燈をかいだて、謹て
諸子と風運をいのる。

擔ひもて毛呂に翁のしぐれかな
震まつや嘸かたぐへ我翁

こがらし

風に笠一蓋もほだしなる
こがらしや潮ながら飛濱の砂
こがらしや磯の水艸みくさも盡ぬべし
木枯や市に業の琴をきく
こがらしや大路に鶏のかいすくみ
木枯やいづことまりの柴車

枯野 艸かれ

猪の篠根堀喰ふかれ野かな

馬附の琴わたりしらに野は枯ぬ

馬の跡枯野の野越いそがるゝ

七ツ子に逢ふて淋しき枯野哉

仕合のうしろ風かな野は枯ぬ

擔ひゆく沽鯉のぞく枯野かな

小としや枯野の末を人の行

地車の轄くさびぬけたるかれ野かな

龍膽りんとくの何おもひ艸野は枯ぬ

旅寓

艸かれや風空さまに脊戸の山

いちはやく枯てや折る蘆のふし

草かれや鶯の居りたる濱庇

艸くさに難炊なんひする樵夫かな

落葉

風の木の葉行さま一葉擱ける

棕の落葉宿に磨ん物もなし

そむき見れば木の葉臺の林かな

夜の音木のは身を刺さおもひあり

まかすれば落葉にせまる戸口哉
日に悲し落葉たゞよふ沙さかひ
うら表木の葉浮べるさび江かな
村落葉鶏ころす人若し
脊につく霜の落葉や朝まだき

霜

此ほどや小蠅なせしも霜の道
何に身を寄すともなしや霜の膈

鶴見橋上

朝夕や鶴の餌まきが橋の霜

兔明樓

海かけて霜の晴見る檻かな
鐘の聲霜を知る夜の眉重き
夕霜の眼には見へで老が膝
燃てたつ燐に霜のけむる哉
鬼齒朶も蘇鉄も霜の且かな
たゞばたて蓬がもとの霜ばしら

江都にひとりの母をもちて、
住よき嵯峨の菴をだに人に
ゆずり、東道の行かひ身を

日に消ぬ霜とやかこつ母の髪

安ふせしも、ひとへに至孝
の爲ときこへし重厚入道
や、としも来て、夏日のま
くらに涼風をまねき、霜雪
の床に埋火かきうがち、い
たはりけるも老きはるこの
度の別れ、臥て號哭、天に
叫ぶのなみだやまざとな
ん。きく我すらむねつづれ
侍る。憶に秋の半にや、姨
捨山の月かけて、そり捨し
母のしら髪を襟になし、よ
し光寺へ詣んと、すゞるこ
ころのすゞるにたのもしか
りしを。噫

九月十七日、伊勢の吳扇老
人身まかりけるよし、師が
五組糸のひとりなるをや。
そのみかは、一葉菴の古
へ、なつめ菴の明くれ、何
か心なき人はしるらめ。十
月十七日人々ともに追善
の席をまうけて

組そめし糸よかつらよ霜悲し

大順居士を悼て子息に贈る

若き人の經よみ習ふしも夜かな

天明四年霜月廿七日

時は葛の葉のかつ／＼枯
て、ものこひ暗の啼かひな
きゆふべなりけり。みちの
く也蓼(蓼カ)禪師透化まし
／＼けるよし、おもひこま
／＼と、その門人よりつ
げこしける。禪師は伊陽の
産、芭蕉の翁にゆかりあり
て、我爲に翁の枕表紙附屬
の師、且參禪無二の師たり
しをや。

みちのくの空たよりなや霜の聲

毛呂の里はづれに、たがな
づけしや、丸木もてかりそ
めわたる橋ながら、琵琶て
ふ名あるを

橋の霜からげし繩を四ツの緒歟

住吉に詣りて

松風や霜にはゝきして庭神樂

雪

うき雲や罨月夜を鳩の啼
匂ひなき冬木が原の夕あられ
薄暮やあられ興する樽ひろい
小夜あられ起見んばかり降にけり
中空に降きゆるかと夕あられ
つぶくんと蔭の葉に降夕あられ

みぞれ

みぞれでもしらくつもる穂垣哉
延戸やみぞれ一時人こもる
口おしくみぞれにぬるゝ女馬かな

雪

雪がちにみざるゝ簾の篠屋かな
雪まつや我庭もせの笹二ツ
門くや積も定めず雪振す
雪の聲篠三葉四葉のうごき哉
飛たつは夕山鳥かゆきおろし
かいきへてまたあらはれつ雪の鹿

潮ぐもりみぞれの色を濁の雪
橋の雪舟遣り過し願る

雪の松明たとはゝ夜の錦かな
吹こしの雪音たてゝ降夜かな
灯ともさん一日に深き雪の菴
ぬれいろや色なる雪の藪柑子
雪の野に雪をさゝげし荊棘哉
雪の人桑たち丈にすゝみゆく
雪うちや七つの年を身のむかし
園の雪門の雪とて見はやしぬ
引すてし車の数よ夜の雪
降晴て雪氷るかに光さす

雪の日蘆葉亭に遊ぶ

おもしろや旅に傘して雪の宿
見もしらぬ人にもいふ門の雪
川そひや脊ぐゝまり行雪の人

桐淵氏のもとに、さうなき
筆の鑑あるをや。貞徳翁お
よび名たゝる俳士、もゝと

かぞへ六そじにあまれり。

この目故人を友とするのよ
ろこび、花を吟ずれば香風
坐にみち、雪を吟ずれば柳
絮袂に入の思ひを

月雪の墨の香ふかみ古人達

百雉が子をうしなひしを

罨小雪ふた親のこゝろ祭し入

橘

城うらや橘の道に星光る

冬籠

冬ごもり籠兼たる日ぞ多き
冬ごもり流水の晋夜に入ぬ
捨られぬものはこゝろよ冬籠

里恭亭

金屏に旅して冬を籠る夜ぞ

埋火 火桶

埋火や駢の中のほのあかり
人とひぬ火桶譲りて粥たかん
おしむ夜や埋火くらくいさり寄る

埋火やうちこぼしたる風邪藥
埋火や夜學にあぶる掌たまたま

遠つ人まつとききく几秋女、
こたびはわざとしも人もて
迎ひられつゝ、至りて面す
るに、まうけのホ匂いとせ
ちに、酒よきものすゝめも
のし、老のいたはりまめな
り。蕉翁に園女あり、鳥醉
に星布あり、几秋あれど、
其師おとりぬるぞくちを
し。せめて埋火のもとに翁
のゆい章を夜話にとりまじ

へ

語る夜のつきぐしさよ桐火桶

巨燵 湯婆

人老て巨燵にあれる踵かかとかな
茶釜髪湯婆たゝきて寐ぬ人か
一夜ふた夜のちはたんぼも煩わづらはし

椿

野火留にて

妻も子も椿火に籠る野守かな

をかしげにもへて夜深し椿の節
いちはやくもへて甲斐なし椿の薦

寒

くらき夜はくらきかぎりの寒哉
くちおしや寒夜にくちく捨ごゝろ
雷一聲まゝしからず寒の雨

氷

あかつきや氷をふくむ水白し
薄氷雨ほちくくと透すなり
鶏の背に氷こぼるゝ菜屑かな
氷る夜や諸手かけたる戸のはしり
菱の實の氷つきたる目かいかな
日出たくも酒はこぼらぬためし哉

凍

鼻も死なねば凍ぬ梢かな
庭艸のよごれしまゝに風の凍
石に蝶もぬけもやらで凍しかな

冬の月

寒月や白紙の飛狩のあと

寒月や柴ぬすまれし咄し聞
浅からぬ鍛冶が寐覺や冬の月

鉢たゝき

川ぞひや木履はきたる鉢叩
野ざらしに何事いふぞ鉢たゝき

臘八

臘八にせめてうたがふ人もがな

紙衣 ふすま

二冬やこそくりなれし古紙衣
すさまじや市の食の風たまひ

網代 霖

あじろ家の人住と知りて月寒し
網代木のそろはぬかけを月夜かな
行もどり霖に啼いよめ（鳩）かな

河豚

ふぐ提て竹の中道誰が子ぞ
鰻汁やおもひくゝの八仙歌
ふぐと汁ひとり喰ふに是非はなし

冬の鰻

摺墨の香は忘れずよ冬の蠅
冬の蠅貧女が髪にむすぼるゝ
家の蠅凍て死たる骸もなし

千鳥

兵庫の海にて

酒桶に千鳥舞入あらしかな
遠浅や月の千鳥の舞もどる
あらし波風千どり聞夜の捨心
千鳥きく夜衣にたちし松葉かな
假まくら魚藏に千鳥降がごとし
小夜ちどり人喰犬も吼るなり
羽箒のふいと悲しくちどり啼

冬の鳥糞

鴨啼や浦淋しくもたつ楸
日に鴨の白沙あゆむ尾ぶりかな
夜の鶴鴛鴦の中よりも哀なり
松二木ひと木にをしのやどるかな
をし啼や一節切ふく瘦おとこ
落し來る鷹にこぼるゝ松葉哉

朝川や鷹野の躰を鳥の影
右になし左りにすらんぬくめ鳥
跡先に雀飛びりみそさゞる

冬の艸木

佳ばかり茶の花垣ぞうらやまし
茶の花にたとへんもの敷寂茶
茶の花や誰が箒せし里の道
茶の花に今般の雉子かくれけり

かな川蓬谷亭

橙や藏にそふ江の寒からず

徐柳菴やぶれたるを、そこ
の左隣なるもの、ふたゝび
なせしよし告越けるよろこ
びを

枯しとてからしそ柳春ちかみ
鶏を盗しは誰かれやなぎ
びわの花汝みのるはいつの事
水仙や折葉もさらに濱あらし
寒菊や面をこぼす身のいとま

かへり花

返り花いはゞ老木のおとろひ敷
かへり花咲よしもなく咲にけり
すかさずや道に酒賣歸り花
十月の櫻つぼめる木かけかな

麦まき

畑中や種麦おろす麻ぶくろ
しるやかぎり麦まく末の汐畑(煙カ)

掛菜

程あらで掛菜にむつき千家哉
里侘しかけ菜が下のつり階子
掛菜して世をやすげなる縣かな
みのむしの掛菜を喰ふ静さよ

不分題

立出て鶏の雛見る小春かな
炭がまやぬりこめられし蔦がづら
引すゝむ大根の葉のあらしかな
おもひしか菰のうしろの瘦かぶら
あるかひも宿は志卷のやれ簾
組かけし塔むづかしや冬木立

から鰯の潮にもどるひとつかな
殻かきや世には出られぬうつぼ舟
から鮓の口はむすばぬをならひかな
わだつみや餌だにまかで海鼠かく
冬の夜や鶴の聲をきゝわぶる
椿履のうしろさびしや寒念佛
隣家のよるこべるさはきに

旅中
寒梅に比す産聲は男かな
髪置は千代経て白きためしかな

冬の見よむさし野の比企野より

煤掃

蕉翁の誹波及すが中、猶
波及せんのねがひ、且暮
とふ友にかつて倦ず。ゆ
へに塵埃をまぬかれんと
にはあらねど、市中のす
みかいかんがせん。ひと
とせの塵埃今日にいたり
て、はきはちはびれ、さ
さ竹のさゝほもこぼるゝ

ばかり、是たが身につむ。
積ともまゝ、それがし翁
の誹波及せんの願ひ、市
中の隠にしあらず。隠に
しなきにしもあらずとい
ふ事を、薄酒兩三杯ひと
りほこりて
掃からにおどろかれぬる菴の煤

歳暮

脊戸に門に師走月夜の米俵
つくろはぬものや師走の猿すべり
かぞへ日を雪間の霜のひかりかな
いろくゝに追るゝとしをこよみ賣
年のいそぎ癡宮の繪馬やをしの縫

臘月今日、身貧にして濃酒
佳肴をうらむ。

行年やひとり嚙しる海苔の味

賓客あり、青樽を携て我を
酔しむ。我爲には此夜の君
子なることを

酔をとともに春待年をおしむ哉
鼠子も春待としの一夜かな
行や年また逢ふよしもうるま人

この句は寛政二年來朝の
琉球人歸郷のころの吟也。

月雪や旅寐かさねてとし一夜

伊勢年籠

とし籠もみ火の御灯拜みけり
年も良くだかけさそふ松の風

冬詠都二百十八句

寛政五癸丑歲十二月穀旦
門人 崇兆謹書



師は日東の青蓮居士にて、一酒百詠と人まうしければ、健なりける六十年が程の詠數句類を思ふべし。しかるをかうる豆喰鳥が、冬の日のみじかき背にほくくとのみ拾ひ得たるは、椎の實のしみてなるべき業にもあらねど、ひそかにおもふ事あり。昨日はよし野になど聞へて、一枝を贈りたらんに、誰かすくなしとするや。却てあはれぞおほか

師は日東の青蓮居士にて一酒百詠と人まうしければ健なりける六十年が程の詠數句類を思ふべししかるをかうる豆喰鳥が冬の日のみじかき背にほくくとのみ拾ひ得たるは椎の實のしみてなるべき業にもあらねどひそかにおもふ事あり昨日はよし野になど聞へて一枝を贈りたらんに誰かすくなしとするや却てあはれぞおほか

る。蓋別に記行二卷

あり。そは同郷交河

がひろひ得て、遅櫻

さく頃を見しらせん

となり。是又一枝を

贈の意ばせにして、

渠も只まめくひ鳥が

餌俗に多少をいはざ

る事を、そもく師

を白に吟じ花にた

とへたるは、門生

等がわりなきこゝろ

歟。

樞寮碩布

丁未秋七月危病之志を

纏て校正補刻畢

還錄 春秋庵梅笠誌

春 秋

其の一回て交河の如きは終るに遅櫻
さく頃を見しらせんとなり。是又一枝を
贈の意ばせにして、渠も只まめくひ鳥が
餌俗に多少をいはざる事を、そもく師
を白に吟じ花にたとへたるは、門生
等がわりなきこゝろ歟。

樞寮碩布

丁未秋七月危病之志を

纏て校正補刻畢

還錄 春秋庵梅笠誌



京都 書林

太坂 書林

江戸 書林

三條通升屋町

心齋橋筋安堂寺町

今順慶町

日本橋通一丁目

全二丁目

本石町二丁目

芝神明前

浅草茅町二丁目

日本橋四日市

日本橋北十軒店

出雲寺文次郎

秋田屋太右工門

堺屋新兵衛

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

英大助

岡田屋嘉七

須原屋伊八

山城屋政吉

播磨屋勝五郎